特別寄稿

氣の形とカオスのかたち —混沌思考の東西—

中村 清

明治鍼灸大学人文科学教室

The Form of Qi and the Image of Chaos

Kiyoshi NAKAMURA

Department of Humanities, Meiji University of Oriental Medicine

千字文に「形端表正」という一句がある。千字文は5世紀頃、中国の梁の武帝の時代に編纂された識字用の字書であるが、その後今日に至るまで版を重ね、書道のお手本として使われている。中に収められている語句は、当時の人々の思いや状況を反映している韻文である。一般人の口にしてきたことばや伝統的な考え方を知る手がかりにもなるから、この語句を出発点として、形についての東洋的な考え方と西欧的現代自然科学の考え方を比較してみたい。

形端表正の語義と句義

形端表正、これをいちおう「かたちただしければ、おもてもまただし」と読むことにする。この句の意味はいろいろに解釈できるだろうが、それを考える前に、この句の中での字義を検討しておくことにする。

「**形**」は、一般に目や手で感じられる物体の様子を言うが、中国古典の中では、形骸、形式、形象、形色などと使われ、また特に人の肉体を指すことがある。ここでは身体的な外見を言っている。

「**端**」は、端緒とか端倪、端末のように「はし」「始め」の意味のこともあるが、端座、端正、端麗では正しい、真っ直ぐ、整った、の意味である。

この句の場合には後者である。

「**表**」は表現、表示、表明などと同様ここでも、あらわす、明白にする、しるす、の意味で使っている。他に、「表式」のように、規範や手本の意味でも使われる。

「**正**」は正義、正確、正座、正体のように「ただしい」であるが、正気（元気）、正因では「道」のことを指している。正客、正妻では「かなめ」である。

これらの語意が組み合わされて、一般に上の語句は次の意味に解されている。

- (1) 形態が正しければ、その姿も直く正しくなる。あるいは、
- (2) 自分自身でいつも形を正しくしていれば、自ずから姿も端正に見えるものである。

この(1)は、むしろ精神的な内面性が外面への現れの元であることを言い、(2)では、形はむしろ挙措振る舞いのことで、その不断の心得を論している語句になる。

この4字句には、実は対になったもう一つの句が先行している。それは「**徳建名立**（とくたつことはなたつ）」、即ち徳がたしかに定まれば、名声も上がる、である。その後続くものとして考えれば、その結果身体の動きも、容貌も端正になる、という意味になる。

この句は本来内心の道徳を説く処世訓であるが、ここでは、特にその外面の形態の形成における内面的因子、外見される形態の読み取り方、解釈の仕方という点を取り上げたい。形は現れたものであって、現象の奥に形の無いものが存在し、その結果を我々は目にしている、ということである。

形と混沌についての思想

ここでもう少し中国古典における「形」の用例と語義について集めておく。形とは、感じられるもの、身体として精神と区別されるものである。「形勞則神亂（形勞すればすなわち神乱れる）」、「夫形者生舎也、氣者生之充也、神者生之制也（それ形体は生命の宿るところ、志は生命の実質、精神は生命の統率者なり）」などと淮南子にあり、肉体と精神の関係について言っている。「聴於無聲、視於無形（声なきに聞き、形無きに見る）」、「去聲色、禁奢欲、安形性（華美を避け、欲望を抑え、感覚を刺激しないようにする）」など、礼書には姿形を整えるべきことが多く説かれている。つまり守られるべき形式としての礼を教え、道を体現するものとしての外面が形なのである。これが道家思想になると、さらに内面性が強調され、ある意味の形の否定が語られる。「以有形者、象無形者、而定矣（形有る者は、形無き者に象って定まる）」、「故形非道不生（形つまり肉体は道

にあらざれば生ぜず）」、「有乎生、有乎死、有乎出、有乎入、出入而無見其形、是謂天門（生に有り、死に有り、出するに有り、入るに有り、入出してその形を見ること無きを天門、つまり無限への道と言う）」など、莊子においては思想が純化されて、万物の根源は無としか表現されず、それぞれの形を持つもの、つまり有そのものはそれ自体で形を持ってない、天門は無そのもの、無形の自然の道が発現して有形になる、とするのである。こうした道家の思想では、形の奥に物の本性を認めるのである。

しかし古来中国思想では、万物を形成する根源の原料は氣とされており、千変万化する自然の形象の元には氣の働きと流れがある。ところが氣は森羅万象の形成原理ではあるが理念的なもので、それ自体で形有るものとは言えない。その点で道家思想の「無」につながっている。莊子では、世界の真実態は混沌なる無であって、それは道であり、物質レベルの原理としては氣と称されることになる。混沌といった哲学的表現は、自己の「無知」「無言」を告白しなければ受け入れてもらえないような考え方であるが、無限定で無限の可能性を蔵している存在と言うこともできる。秩序ある形態が産み出されるまえの状態であるが、形あるもの、万物を作り出すための法（のり）もまたそこに秘められているのである。

氣は、元々はかすみや水蒸気のような形に現れ

図1 飛廉（蜚廉）—仙人と共に描かれている怪物風神の模写—
疫病を発生させる神体として怪異な姿に描かれている。

る自然現象に結びついた概念であったのであろうが、それが空気、寒気、氣息、さらには元気のような抽象化された概念に、そして万物生成や身体活動の根元的力、そして朱子学の宇宙万物形成の質料という概念に発展ないし展開していったと推定してよいだろう。これはいわば形而下つまり形をなしているレベルの原理であり、それを越える生成の形而上の原理は理である。これが朱子の理氣の学である。氣は、氣象、氣丈、氣色、氣儘、氣體、氣配り、気分など我々にも身近な言葉として使われており改めて説明するまでもないが、そうした形を取る以前の、いわば混沌状態を古人はあえて図像化して描いている。その一つを図1の飛廉（または蜚廉）に見てよいだろう。この怪物は人々の健康を害する邪気をもたらす風の神体、つまり風神を描いたとされる絵の部分的模写である。風は自然現象の基本的な形であり、人の健康や病もそれに懸かっているとされる。軽々と天駆けるその鹿とも豹とも言えるその体軀、蛇の尾、雀の頭などで、氣としての特徴を描こうとしていると見られる。

氣は自然現象から社会の出来事に至るまで、また人体の状態に関しても、あらゆる形を取って現れるものという概念であり、その表れた形を通じて物事の本性が知られる。またその事物にかかわる法則や原理が、ついには天意さえもが道として悟られることになる。無とさえ名付けられる道は混沌と言ひ換えてもよく、それもやはり形を通して知られるのである。

ゲーテの原型

ここでゲーテを持ち出す理由は、ゲーテが深く西欧的近代的精神の持ち主であり科学に強い関心を有しているながら、生命的な直観を重視する思想家である点を、東洋的な自然の見方と比較してみたいからである。

「超感覚的な原植物の感覚的な形は考えられないであろうか。……植物のあらゆる部分の根本的同一性が（私に）完全に開示された」（箴言と省察。以下ゲーテからの引用の訳文は高橋義人氏による）。「これは本質的な形の認識なのです。自然はこの本質的な形といわばつねに戯れているよう

なもので、戯れながら多種多様な生命を生みだしているのです。」またゲーテは人体を含む動物についても同様に原型という考えを抱き、植物のように確信に満ちて首尾良く成功したとは言えないまでも、「どのようにしてこうした（動物の）原型は見つけだされるのであろうか。じつはそれは、すぐにこの原型の概念自体が示してくれている」とその研究に腐心しており、様々な形態から抽象した普遍的な形象を設定しようとしているのである。こうした意味の形象の抽出は、抽象的概念形成とは異なり、先に述べた東洋的な氣のイメージの形成にも相通ずるところがあるように思われる。

またゲーテは近代数理的自然科学（ニュートンの光学理論など）と対決したことで有名であるが、それはその抽象性に対してである。彼は数学の価値と意義は十分認めながらも、それ自体の限界内に留まるよう主張し、数学的科学が自然の諸問題に尚早に結論を出すことに反対した（カッシーラー）。しかし目にする自然界がいかに生き生きとし生命力に溢れていても、その個々の具象例にこだわってでは真実は見えてこない。彼は「思惟について考える」ことは退けたが、理性を働かせよ、と主張している。出来上がってしまったものに向かい、固定した事物を相手にする悟性（Verstand）とは異なり、彼の言う理性（Vernunft）は生成するものに向かう。つまり仕上がった事物から一面的な法則を引き出そうとするのではなく、存在するいっさいの事物を動いているもの、運動から生じているもの、無に帰してしまわないように常に運動に支えられているものと見る精神の能力が彼の「理性」なのである。だから理性は観照の働きをもつ直観である。その働きにおいて自然と精神とは一体に結びつき、しかも互いに対立し合っている。溢れる興奮を感じさせる自然界の生命力と向き合い、共感する精神なのである。

彼は原植物といった「モデル」を考えたが、それは物理的な形式の類似を言っているのではなく、またある形を取って現れているとしても、それ自体で自然界に存在しているものでもない。個々の事物はバラバラではなく、相互に発生的連関を保っており、別々でありながら生きた関係を

結んでいる。プリズムを通して見る7色の色彩は、確かに波動として量的違いでしか区別がないという一面はあるが、それをも相互に生ける関係をもつ全体として見ようとするのである。生命を犠牲にして無理矢理普遍的抽象概念を獲得しようとするのではない。豊かさ溢れる南イタリアの明るい自然を前にして、現実の自然の具体的本性として感じられる生命力の全体の中に、法則やリズムをそのままに直覚し、それを自分の精神の中に流入させ、それといわば一体化するのである。ゲーテの感じている自然の形態や描くイメージの特徴は、動的で生きていること、創造的であることであり、それに共感すること、共振することによる実感的認識なのである。

ダーウィンの進化の樹のイメージ

ゲーテから約70年後、さらに西欧科学が発展を続け、19世紀後半には地球規模の科学研究によ

る画期的見解として進化論が登場する。ダーウィンの進化論の新しさは、それまでの生物の種の固定的考え方から、より現実にもっと流動的なものとしての見方に転換した点にある。彼の革新的見解をリードしていたとも見られるイメージが、残されたノートの中に描かれている。図2はその模写である。ダーウィンの、世界の海を航海したフィールドワークは、実証的研究調査であり、近代精神による科学研究である。彼は時代の技術文明の工夫と努力を生物に適用するなら、自然の博物学研究はもっと興味深いものになろう、と書いている。そしてそれを自ら実行するが、千変万化する生物の形態の観察について類比の方法を適用する。「それゆえ私は類比によって、かつての地球上に生存した生物はすべて、おそらく生命が最初に吹き込まれたある一個の原始形態から由来したものであらうと、推論せざるをえないのである」(種の起源、訳文は八杉竜一氏による)。この原始

図2 ダーウィンの進化の考えを示すイメージ(進化の樹)
ノートに書かれたスケッチの模写、説明図。

形態思考はゲーテのそれに似ており、同じように生命の豊かさ、力強さを実感し直観していたと言ってよいだろう。そしてその相互のつながり、系統をイメージしたものが進化の樹である。「そのような雑踏した堤（＝自然界）を熟視し、相互にかくも異なり、相互にかくも複雑にもたれあった、これらの精妙につくられた生物たちが、すべて、我々の周囲で作用しつつある法則によって生み出されたものであることを熟考するのは、興味深い。」彼は科学者として地球という惑星が厳然たる、客観的重力の法則によって回転していることを認めながら、一方生物の世界についてはその無限の多様さ、引き続き展開していく生成の壮大な眺めに驚嘆して賛歌を歌うのである。彼もまたニュートンの科学的精神、即ち全体を説明してくれる単純な法則を求める期待を抱くと共に、半面驚くべき生命力の世界に直面して、人間に許された不完全な認識を、あるいは理解をかき乱す不規則性をそのままに受け入れたいとする気持ちも持

ちあわせていたのである（グルーバー）。すなわちこの図で描かれているのは、ある混沌とした自然の生命力を具象的にイメージしてスケッチを試みたものと見てよいだろう。

カオスのかたち

カオスは混沌に相当するギリシア語であるから、それに形があるというのは矛盾した言い方である。しかし近年話題を集めている複雑系とかフラクタルでは、カオスの形ということが扱われているし、それには前述の無の知とか形なき物の形といった表現と相通ずるところがあるようである。簡単に比較してみよう。

カオスとは形の定まらない混沌とした無秩序のことを指す語であるが、その形に関係するギリシア語の単語に3語あることは周知である。エイドスとエイコン（アイコンともアイコンとも言われる）とモルフェである。その間の区別については解釈が分かれるが、一般にエイドスはいわゆる見える

図3 マンダラフラクタル（概念図）

形、型、種類などを指し、エイコンは主として似姿のことで類似や肖像、そして今のパソコン用語のアイコンとして使われ、モルフェは外見や姿形のことを言い、解剖学や病理学の扱う形態につながっている。この型式、姿、形態のいずれをも否定したものが混沌であるが、その否定の仕方や対象では互いに異なる。形式や外見より内面の真価を見ようとする精神主義の立場については前述したが、昨今の複雑系に関連する場合にはランダムという要素を加えて、法則をふまえた出発点を前提にしながらも、その結果については予測不能だという意味で混沌であり、定量化が困難な成り行きといった意味でカオスと呼び、複雑な要素を組み合わせて計算した結果表れてくる無秩序といえる形を、いわゆる実験科学的方法を越える範囲の現象を表現するために「かたち」と、いわば大和言葉で書くことを提言している人もある（例えば小川泰氏など）。原子模型、宇宙像、大気循環モデル、さらに毎日お目にかかる天気図など、科学的なモデルやイメージがしばしば描かれるが、厳密な法則、理論、測定、データに基づいて描かれているにもかかわらず、目に見える形に描き出すには自ずから限界がある。特に物理現象には、複雑な因子が絡みあってゆらぎが生じ、ある点を過ぎると過程はカタストロフィックに変わる。つまりそれ以上は混沌状態というわけである。そうした決定論から結果した非決定性を示す一つ概念図が図3のマンドラフラクタルである。曼陀羅は密教の仏画であり、いささか性質の異なる絵ではあるが、それが無限を感じさせる絵を描こうとしているという意図において、自己相似性で無限に描き続ける可能性を見せるフラクタル図形と構造的に類似している。形に表現し切れないものが、なお形に表わされているからである。その意味で曼陀羅が超越的な精神世界を感じさせようと描かれるように、フラクタル次元の図もある意味で形を越える次元を提示しながら、実際の複雑な現象のシミュレーションとしての表現力が認められ、有用さが認められているのであろう。フラクタルは元々、六角形の雪の結晶のように相似形が細部に無限に延びていく造形といった視覚的映像から出発して認識されたものである。形が「かたち」

として、モデルの限界を超える事態をも含めて言う言葉になったと言えるかも知れない。そのままでは見えないものを、見える形を通して感じさせてくれるのである。

かたちが語る事態の共感的認識

混沌やカオスの認識は、自然に対して我々が持つべき見方の次元を示していると言える。東洋思想は重層思考だと論じたことがあるが（明治鍼灸医学第19号）、形の奥に有るものを見ようとする点で、このかたちの認識もそれと同工異曲の精神活動である。既に2500年前にプラトンは形という仮象の不完全さを嘆き、超越的理想のアイデアの認識を称揚したが、弟子のアリストテレスは形相つまり形式の原理や原因は眼前の事物に内在するのだと論じた。どちらの説明を取るかはそれ以後今日に至るまで立場の分かれるところであるが、いずれにしろかたちを通じて真の知識を獲得しようとするところ、即ち形而上的なものが感得されている点は共通しているのである。

ものの本性は形、かたちを通じて表れる。体において精神は現れる。混沌、カオスであってもかたちを通じて感得できる。身近なテレビやラジオ、携帯電話では、チューナーを回して波長が合えば共振し、同調して遙か彼方の音声が聞こえ、映像が見えてくるように、人の形即ちからだを見ていても、見る人の精神ないし心と対象の実体や本性との間に同調（共振、共鳴、共感）が生ずれば、事物のかたちが、実像が、実態が見え、法や法則が、人生の必要事さえ見えてくる可能性がある。人格間の真のコミュニケーションの可能性をそこに見てもよいと思う。またそこに臨床的なまなざしのあり方をつなげて考えることもできるだろう。

文 献

- 1) 有馬朗人、他：混沌；東京大学公開講座53。東京大学出版会、東京、1995。
- 2) E・カッシーラー：理念と形姿—ゲーテ・シラー・ヘルダーリン・クライスト。三修社、東京、1978。
- 3) ジュディス・ヴェクスラー：形・モデル・構造—現代科学にひそむ美意識と直観。白揚

- 社、東京、1986.
- 4) ゲーテ：自然と象徴－自然科学論集；富山房
百科文庫33. 富山房、東京、1990.
- 5) 小川 泰：「かたちの知・知のかたち」. 現代思想、20(11)、青土社、東京、208-219、1992.
- 6) ダーウィン：種の起源（下）；岩波文庫. 岩波書店、東京、1987.
- 7) ボウルディング：ザ・イメージ生活の知恵・社会の知恵. 誠信書房、東京、1975.
- 8) 加納喜光：中国医学の誕生；東洋叢書2. 東京大学出版会、東京、1992.
- 9) I. プリゴジン、I. スタンジェール：混沌からの秩序. みすず書房、東京、1996.
- 10) 武田 暁：形の科学－複雑系-物理・生物から経済まで. 裳華房、東京、1997.
- 11) 科学シミュレーション研究会：パソコンで見る複雑系・カオス・量子シミュレーションで一目瞭然. 講談社、東京、1997.